

休居士へ頼みし時、利休與二郎へ申さる、は、地をクワツクとあらし候得と也、其時元伯年十一にて側七に居て覺へ被申候よし、逢源齋筆記に有、

〔雍州府志七土産〕釜 煮湯之具也、中古於筑前葦屋里所鑄號葦屋釜、其所畫之紋畫僧雪舟之所圖者、間有之、雪舟備中人也、去葦屋不遠、且雪舟應大内氏之招、而時々往來周防長門之間、治工請之、使畫釜之模範而鑄之、多有松杉或梅竹之圖、是謂下畫、下野國天明之所鑄、是謂天明釜、或作天貓葦屋、天明如今不鑄釜、厨料之大釜、或大鐺賣之、伊勢國之所鑄、草花竹樹等之紋甚細密、是謂伊勢釜、○中曾豐臣秀吉公浴有馬温湯、千利休從之、於阿彌陀堂庭構茶亭、秀吉公來臨斯亭、利休煮湯點茶而獻之、其所用之釜形狀相宜、茶人甚慕利休、摸此釜而所鑄者、不論新舊號阿彌陀堂釜、今京師釜座彌右衛門并孫三郎等代代爲巧手釜鐺類悉鑄之、

〔茶窓閒話上〕利休時代に、京師に住居せる與二郎なるもの釜の名人なり、子孫今は相續せず、これを京釜といふ、利休の氣に入りて好み鑄させしが多しとなん、

〔太平記二十六〕執事兄弟奢侈事

越後守師泰高ガ悪行ヲ傳聞コソ不思議ナレ、○中天王寺ノ常燈料所ノ庄ヲ押ヘテ知行セシカバ、七百年ヨリ以來、一時モ更不絶佛法常住ノ燈モ、威光ト共ニ消ハテヌ、又如何ナル極悪ノ者カ云出シケン、此邊ノ塔ノ九輪ハ、大略赤銅ニテアルト覺ル、哀是ヲ以テ鐘子ニ鑄タランニ、何ニヨカラズラント申ケルヲ越後守聞テ、ゲニモト思ケレバ、九輪ノ寶形一下テ鐘子ニゾ鑄サセタルケル、ゲニモ人ノ云シニ不差、膚竅無クシテ、磨クニ光冷々タリ、芳甘ヲ酌テタツル時、建溪ノ風味濃也、東波先生ガ人間第一ノ水ト羨タリシモ、此中ヨリヤ出タリケン、上ノ好ム所ニ下必ズ隨フ習ナレバ、相集ル諸國ノ武士共、是ヲ聞傳テ、我劣ラジト、塔ノ九輪ヲ下テ鐘子ヲ鑄サセケル間、和泉河内ノ間、數百箇所ノ塔婆共、一基モ更ニ直ナルハナク、或ハ九輪ヲ被下、マス形計アルモ、ア